

ヒンバ族の砂漠ゾウエコツーリズム ナミビア (砂漠の事例)

ナミビア北部の砂漠地帯で、遊牧民ヒンバ族の一村が、生業の先細る中で砂漠ゾウのエコツーリズムによって生計を立てている事例を紹介する(吉田 2007)。砂漠のオアシスともいえる季節河川の河畔林を拠り所として暮らす村が、同じくその河畔林に生息している砂漠ゾウを利用したエコツーリズムを始めた。乾燥が厳しい地域で生業から市場経済へ転換しても、地域の自然環境によって生きる道を探る例としてこの研究報告を取り上げる。

①基礎情報

a) 気候：国全体が乾燥気候で、特に沿岸地域の乾燥が激しい。降水量は北東部の内陸に進むにつれ多くなる。年平均気温 19.7℃、年降水量 346.2 mm。

b) 国土面積と人口：82.4 万 km²、210.2 万人。

c) 民族：黒人 87.5% (オバンボ族 50%・カヴァンゴ族 9%・ヘレロ族 7%・ダマラ族 7%・ナマ族 5%・カプリヴィ族 4%・サン族 3%)・混血 6.5%・白人 6%。

d) 宗教：キリスト教 76.0%・伝統信仰 6.0%

e) 土地利用：農地〔耕地 82 万 ha(1.0%) うち樹園地 0.5 万・牧場と牧草地 3,800 万(46.2%)〕・森林 766 万 (9.3%)。

②調査地の自然環境

ナミビアの気候は海岸部から北東方向にかけて降水量が増え、砂漠からステップ、サバンナと景観が変化する。海岸部のナミブ砂漠では降水量が足りないために農業ができない。年間降水量 250mm 以下の地域では、まばらな草と灌木があり、ヤギやヒツジが飼われている。年間降水量 250-400mm の地域は小型家畜からウシへの移行帯になっている(水野 2007)。本事例の調査地はナミビア北西部のクネネ州の季節河川ホアルシブ川中流域にあるヒンバ族集落である。ここは北部ナミブ砂漠に位置し、年間降水量は 50mm である。人々は細々と牧畜を行っている。

季節河川とは雨期に数回水が流れる川である。このホアルシブ川にはアカシアが優占する河畔林が形成されており、砂漠ゾウ、ライオン、キリン、スプリングボックなどの野生生物の生息場所となっている。その外側は砂漠地帯で植物の生育はほとんど見られない。

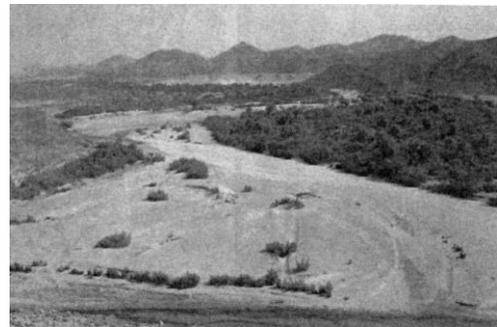


写真 1 ホアルシブ川の河畔林
出典：吉田美冬「ヒンバと砂漠ゾウ」より

③エコツーリズムへの参加

ホアルシブ川沿いにヒンバが移動放牧キャンプの一つとしていたこの地域に定住が始まったのは 1980 年代である。定住が始まったあと、NGO によって砂漠ゾウを目玉とした観光開発計画が始まり、1990 年代には住民参加型の観光産業が盛んになった。これによって定住が続き、牧畜中心から観光業中心の生活へと変化が起きた。1995 年に開園した村経営のキャンプサイトは、30 カ国から観光客が来る。キャンプの経営は NGO が指導し、利益分配などは村民が行っている。ここで 21 人の村人が雇用され、ロジ利益の 5%が村のコミュニティに入る。

④生活

普段のヒンバの食事はトウモロコシ粉の粥で、その他には2週間に一度程度ウシやヤギ、スプリングボックなどの肉を食す。観光収入が村に入るようになっても大きく変化していない。村の一般的な世帯の現金収入は、年金を除くと、キャンプサイトなどの観光関連収入が8割近くを占める。トウモロコシの粉をはじめ食料は現金で購入する。その他、学費、衣服など生活の大部分を現金に依存している。現在この地域の人々は、砂漠ゾウのエコツアーリズムで生計を立てているといえる。

⑤河畔林が支えるヒンバと砂漠ゾウの未来

住民への聞き取りから、ゾウによる河畔林のダメージはここ10年で急激に大きくなってきた。この調査地域付近に訪れるゾウは国立公園からの個体流入もある。ゾウによる樹木の破壊と観光発展による地域開発は河畔林の存続を危ういものにしていく。河畔林の劣化はゾウの来訪機会を減らし、観光業の衰えにつながる。

この土地に滞在してヒンバとともに生活した著者は、牧畜業が先細る現在、ヒンバが簡単に現金依存の生活を変える事は難しいと見ている。この村のヒンバが砂漠ゾウのエコツアーリズムで生きていくためには、季節河川の河畔林の維持管理が必要である。

この事例の地域は砂漠で、人が生活する自然環境としては非常に厳しい。その中で資源を持続利用した生業は先細っている。日本の里山とはおかれた自然環境や外観が著しく異なる。しかし、自分たちの生活を続けるために、その拠り所である地域の自然環境を守ろうとしているという点では、この極端に厳しい環境にある地域も本質的には同じである。

参考文献

吉田美冬. 2007. 「ヒンバと砂漠ゾウ」 地理 10月号 Vol.52,p92-97.

水野一晴. 2007. 「ひとつの国に多様な自然・民族・言語・文化が共存しているアフリカ」 地理 10月号 Vol.52,p58-65.